

北海道は江戸時代までは、蝦夷地と呼ばれ、田沼意次などが開拓を進めていたものの、和人にとっては異境の地であった。蝦夷地というのは千島や樺太も含めた名称で、アイヌの地であった。すでにロシアが南下してきていて、ペリーが黒船でやってくる 1853 年より 50 年も前にロシアの軍艦が、日本の開国をもとめて長崎までやって来ている。また、1853 年（嘉永 6 年）には、ペリーに遅れること 1 カ月半にはブチャーチンが軍艦を率いて来航している。

アイヌ語に関心をもたれるようになったのは明治時代以降で、イギリスの宣教師ジョン・バッチェラーが明治 10 年に布教のために来日し、アイヌ・コタンに住みつき献身的にキリスト教の布教につとめるとともに、1889 年には "An Ainu-English Dictionary" の初版を出版し、また 1897 年には聖書を翻訳している。その後、金田一京助がアイヌのユーカラを収集し、アイヌ語とアイヌの文化を研究したことはよく知られている。

アイヌ語は消滅の危機にある言語のひとつである。現在ではもうアイヌ語を母語とする人はいない。しかし、ひとつのことばが消滅するということは、ひとつの文化が消えてしまうということだから、アイヌの人たちを中心に復活運動も行われている。

### アイヌ語の聖書

バッチェラーのアイヌ語聖書ではヨハネ福音書第 1 章(Yoannes)は次のようになっている。

#### 1,初めもことばがあった。

Atpake-ta anak ne Itak an,  
はじめ-に (焦点形) ことば ある

○アイヌ語の Itak (ことば) は東北の恐山などにみられる巫女の「いたこ」と関係のあることばであるといわれている。Kamui (神) は日本語からの借用語である。

○アイヌ語には焦点形があり、主語あるいは目的語を強調する。anak ne は成句で主語を強調する。

○an は英語の be 動詞にあたる。

ことばは神と共にあった。

Itak anak ne Kamui tura an,  
ことば (焦点形) 神 と共に ある

ことばは神であった。

Itak anak ne Kamui ne ruwe- ne.  
ことば (焦点形) 神 である 確かに

○ne は動詞 (～である、～になる) にも使われる。

## 『アイヌ神謡集』を読む

ユーカラをアイヌ語で読んでみたいという気持ちになることもある。しかし、新しい言語を学ぶとなると3年間はかかることを覚悟しなくてはならない。金田一京助と知里真志保の『アイヌ語法概説』やバチェラーの文法書や辞書も手に入る。三省堂の『言語学大辞典』はアイヌの項だけで90ページ近くを費やしている。しかし、文法書というのは概して血沸き心躍る読物ではない。

そんなあるとき知里幸恵著訳『注解 アイヌ神謡集』（北海道出版企画センター）という本を見つけた。13のアイヌ神歌が原文（カタカナとローマ字で併記）と日本語の対訳がのっていて、そのうえに語彙の解説がある。この本はアイヌの詩がローマ字とカタカナで表記されていて、日本語訳が一行ごとに対訳になっている。昔、英語を勉強していたころ映画のシナリオを対訳にしたものを使って生きた英語を勉強しようとしたことがあった。あれと同じ形式である。しかも、反対側のページには単語の説明や文法の解説があって辞書なしで、アイヌ語の詩を味わえる。

これならアイヌ語の原文の味わいを味わうことができるだろうと挑戦してみることにした。まずはじめは梟の神が自ら歌った歌「銀の滴降る降るまわりに」である。Kotan kor kamuy（村を守る神）であるフクロウの神が、不運で貧乏な nispa（紳士）に恵を与え、村人を仲直りさせ、紳士は村長になるという話である。知里幸恵の日本語訳は流れるように美しい。

「銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに。」と云う歌を私は歌いながら流れに沿って下り、人間の村の上を通りながら下を眺めると、昔の貧乏人が今お金持ちになっていて、昔のお金持が今貧乏人になっている様です。海辺に人間の子供たちがおもちゃの小弓におもちゃの小矢をもってあそんで居ります。「銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに。」という歌を歌いながら、子供等の上を通りますと、(子供等は)私の下を走りながら云うことには、「美しい鳥！神様の鳥！さあ、矢を射てあの鳥、神様の鳥を射当てたものは一ばんさきを取った者はほんとうの勇者、ほんとうの強者だぞ。」云いながら、昔貧乏人で今お金持ちになっている者の子供等は、金の小弓に金の小矢を番えて私を射ますと、金の小矢を私は下を通したり、上を通したりしました。

「銀の滴降る降るまわりに」を『アイヌ神謡集』の注釈を参考に解説してみると次のようになる。

### 梟の神の自ら歌った謡「銀の滴降る降るまわりに」

Kamuychikap kamuy yayeyukar, “sirokanipe ran ran piskan.”  
神の鳥 神 自分について歌う 白金 下る下る のまわりに

○神(kamuy)、白金(sirokani)は日本語からの借用語である。chikap は鳥で、kamuychikap は梟のことである。

○yayeyukar は yay (自分) e (~について) yukar (歌う、語る) である。アイヌ語では動

詞に接頭語（前置詞）がついて目的語などをあらわす。yukar は日本語でも「ユーカラ」という。

（本文）

「銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに、

“sirokani pe ranran piskan, konkani pe ranran piskan”  
 白金 水 下る下る のまわりに 黄金 水 下る下る まわりに

○sirokani（白金・銀）、konkani（黄金）は日本語からの借用語である。

という歌を私は歌いながら、流れに沿って下り、

ari an rekpo ci=ki kane pet esoro sap=as yne.  
 と ある 歌 私たち+する ~しながら 川 に沿って 川下へ行く+私 ~して  
 から

○pet は川で、北海道には登別、中標津など pet（川）の名前のついた地名が多い。

○アイヌ語では日本語のように名詞の後に助詞がついて格を示すのではなく、動詞に人称接辞がついて格関係を示す。ci-ki は ci（私たちは）+ki（~をする）である。

○アイヌ語文法の概説書によると、アイヌ語の人称代名詞はたとえば、見る(nukar)という動詞の場合つぎのように変化する。

	単 数		複 数	
	主語	目的語	主語	目的語
1 人称	ku=nukar	en=nukar	ci=nukar	un=nukar
2 人称	e=nukar	e=nukar	eci=nukar	eci=nukar
3 人称	nukar	nukar	nukar	nukar
不定人称	a=nukar	i=nukar	a=nukar	i=nukar

人間の村の上を通りながら、下を眺めると

aynu kotan enkasike ci=kus kor si=corpok un inakar=as ko  
 人間 村 の上 私たち+通る しながら 自分の 下へ 見る+私 と  
 昔の貧乏人が今お金持ちになっていて

teeta wenkur tane nispa ne  
 昔 貧しい人 今 金持ち ~になる

○aynu は本来人間という意味で、アイヌの自称でもある。Kotan は村である。

○アイヌ語にはハワイ語などと同じように声門閉鎖音がある。teeta は本来 te'eta（テ□エタ）表記すべきところであろう。

昔のお金持ちが今の貧乏人になっている様です。

teeta nispa tane wenkur ne kotom siran.  
 昔 金持ち 今 貧しい+人 ~になる ~のように になっている

海辺に人間の子供たちがおもちゃの小弓に

atuy teksam ta aynu-hekattar ak-sinot pon ku  
 海 その脇 夕方に アイヌ (人間) +子どもたち 打つ+遊ぶ 小さい 弓  
 おもちゃの小矢をもってあそんで居ります。

ak-sinot pon ay e-u-we-sinot kor okay  
 打つ+遊ぶ 小さい 矢 そこで+互い+持って+遊ぶ しながら いる

○e-u-we-sinot は e (そこで) +u (互いに) +we (それで、w は挿入音) +sinot (遊ぶ) で、アイヌ語では動詞にさまざまな接頭辞がつくので、動詞句が一つの文章を構成することになる。

○このような言語はヨーロッパ系のことばにはない特色で、抱合語あるいは複総合語 (polysynthetic language) という。このような特徴はアメリカインディアンのことばに多くみられるという。

○金田一京助・知里真志保『アイヌ語法概説』岩波書店によると「与える (kore)」は次のような人称接辞をつけるという。

私が君に(a-e-kore)、私が彼に(a-kore)、  
 君が私に(e-i-kore)、君が彼に(e-kore)、  
 彼が私に(i-kore)、彼が君に(e-kore)、

「銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに」

“sirokani pe ranran piskan Konkani pe ranran piskan  
 白金 水 下る・下る =の周囲 黄金 水 下る・下る ~の周囲  
 という歌を歌いながら

Ari an rekpo ci-ki kane  
 と ある 歌 私たち+をする ~しながら

○ci-ki の ki (~をする) が動詞で、ci はその主語をあらわす接頭辞である。

子供等の上を通りますと、

hekaci utar enkasike ci-cus awa  
 少年 たち 上を 私たち+通る したところが

(子供等は) 私の下を走りながら云うことには

un-corpoke eho-yuppa ene hawokay  
 私の+の下そこを+走る このように いう

「美しい鳥! 神様の鳥!

“pirka cikap-po! kamuy cikap-po!  
 美しい 鳥+(po は縮小辞) 神 鳥+(縮小辞)

さあ、矢を射て あの鳥 神様の鳥を

keke hetak ak-as wa toan cikap-po kamuy chikap-po  
 さあさあ 打つ+私たち ~して あの 小鳥 神 小鳥

射当てたものは 一番先に取った者は

tukan wa an kur hoaki uk kur  
～を撃つ ～してる 人 先に ～を取る 人

ほんとうの勇者 ほんとうの強者だぞ」

sonno rametok sino cipapa ne ruwe tapan  
本当に 勇猛な人 本当に 強者 ～になる ～をすること ～である  
云いながら

hawokay kane.  
～を言う ～しながら

昔貧乏人で 今お金持ちになっている者

teeta wenkur tane nispa ne p  
昔 貧しい+人 今 金持ち ～である もの

の子供たちは 金の小弓に

po-utari konkani pon ku  
子ども+たち 黄金の 小さい 弓

金の小矢を番えて

po-utari konkani pon ay u-w-e-unu-pa  
子ども+たち 黄金の 小さい 矢 番えて

○u-w-e-unu-pa は u (互いに) +w (挿入音) +e (そこに) +unu (～に～をつける) +pa (複数を表す接尾辞) で、動詞の unu に接頭辞と接尾辞をつけたものである。

私を射ますと、金の小矢を

un-tukan ko. konkani pon ay  
私を+射る ～と 黄金の 小さい 矢

私の下を通したり 上を通したりしました。

si-corpok ci-kus-te si-enka ci-kus-te  
自分+の下 私+を通る+させる 自分+の上 私+を通る+させる

この続きは次のように展開する。

フクロウの神である「私」は金持ちの子どもたちの矢を避けて、仲間はずれの貧乏人の子の矢にみずから当たる。貧乏人の子は私の死体を自分の家へ持ち帰る。

老夫婦が家から出てきて私をていねいに出迎えてくれた。そして「今日は遅いから明日(神の国へ) お送りしましょう」と私を神窓のしたに置いて寝てしまった。

私の魂は真夜中に起き上がり、家のなかを飛びまわり宝物でいっぱいにした。そして、りっぱな大きな家に作りかえた。

夜が明けて家の人びとは起きてみて驚き、私を送るためにイナウや酒を作り村の人びとを招く。人々は家を見て腰を抜かす。

主人が「大神様のお恵みをいただいたのだから、これからは仲良くしたい」と述べると、人々も今まで貧乏人を差別していたことを謝し、酒宴は盛りあがった。

人々が仲良くなったのを見て、私（の魂）は安心して神の国へ帰ってきた。私は人間たちから贈られたイナウや美酒で神たちを招いて酒宴を開いた。

一部始終を話すと神たちからほめられた。私は今も人間の国を守っている。

『アイヌ神謡集』をアイヌ語で読むためにだけにでも、アイヌ語を学びたいという気持ちになってくる。ユーカラも読めるようになればすばらしい。しかし、アイヌ語は日本語や英語などとはまったく違った言語であり、むずかしそうである。

## アイヌ語の地名

アイヌは北海道ばかりでなく、東北地方にも住んでいたことが最近あきらかになってきている。東北地方にもアイヌ語起源の地名がいくつかあって、山田秀三さん(1899-1992)は『アイヌ語地名を歩く』（北海道新聞社）のなかで北海道ばかりでなく、東北地方のアイヌ語起源の地名を紹介しているが、楽しい本である。地名はことばの遺跡である。

北海道の地名はほとんどがアイヌ語地名である。道内のアイヌ語地名の四分の一に近いものがナイとベツであったという。ナイの分布とベツの分布には地域差があるようでナイの方は沢の意味にも使われている。

ナイの例：稚内・ヤムワッカナイ（冷水沢）、幌内・ポロナイ（大きな川）

ベツの例：登別・ムプルベツ（色の濃い川、濁った川）、幌別・ポロベツ（大きな川）

登別にある岡志別はオ・カシ・ベツ（川尻に・仮小屋がある・川）である。可笑内と表記した地名もあるが、オ・カシ・ナイ（川尻に・仮小屋がある・川）である。アイヌ語の地名の大部分は目で見た地形の名であるという。札幌（サットポロ）は乾燥した・広大な地、小樽（オタ・オル・ナイ）は砂浜・の中の・川、室蘭（モ・ルラン）は小さい・坂で、いずれもアイヌ語の地名に漢字をあてはめたものである。日本語の地名も元をたどればアイヌ語である場合が多い。例えば旭川は古くはチュブ・ベツ（日・川）だったものを日本語に訳して旭川としたものである。滝川はソ・ラッキ・ベツ（滝が・懸かる・川）の訳である。また、砂川は旧名をオタシナイ（砂・大きい・川）といった。空地（そらち）は滝が懸かるというアイヌ語である。

山田秀三さんは東北六県を歩き回り、五万分地図に載っていない小地名の調べに熱中した。内（ナイ）といっても、城内とか村内とかはまず日本語を見るべきであろう。それを除いて、約四百の内（ナイ）が出てきた。しかし、音が似ているというだけでは偶然の一致かもしれない。それから北海道と東北を往復して、その現地を比較対照することを始めた。地名を調べるには、まず土地の地形を見て確かめてみなければいけない、ということで山田秀三さんはアイヌの地名に似た地名を東北の地図にみつけると、自分の足でその土地に立ってみて、その地形と観察することにこだわる。

青森県には母衣内（ホロナイ）という地名があり、北海道の幌内と同じである。八戸市の馬淵川の「淵」はベツ（川）であろうと仮説をたてて、その場に必ず立ってみる。白糖（シラヌカ）は北海道の白糖（礫岩）と同じである。岩手県に米内（ヨナイ）、沼宮内（ヌマク

ナイ)があり、宮城県の保呂内(ホロナイ)がある。盛岡市の徳田はト・コタン(沼の村)、あるいはトゥ・コタン(廃村)であろうと見当をつけて現地に出かける。五万分の一の地図の小地名をくまなく調べ、さらに古地図の探して古い地名を調べる。秋田県にも笑内という地名がある。北海道の可笑内(おかしない)と関係がないだろうかと思うと居ても立ってもいられなくなって、現場に急行する。東北地方の「ナイ」は青森県、秋田県、岩手県、宮城県の北部に多く南に行くと急激に減るという。明治になるまでは北海道にはアイヌ語の地名しかなく、東北でも厚司を着た人たちが、川で鮭を取り、野にキツネやウサギを追っていたらしい。

縄文遺跡として有名な山内丸山の内(ナイ)はアイヌ語起源ではないだろうか。内(ナイ)はアイヌ語の nay(川や沢を意味する)に由来する地名で、稚内は冷水沢、幌内は大きな川、静内は先祖の沢を意味するという。東北地方にも米内(よない)とか沼宮内(みやくない)とかナイのつく地名が多い。三内丸山は縄文遺跡である。アイヌの遺跡からは縄文土器は発見されていないというから、三内丸山遺跡がアイヌ人の遺跡であったとはいえないかもしれない。しかし、縄文時代の東北には少なくとも二つの異なった言語を話す人びとが住んでいたことは確かである。

さらに想像をたくましくしていえば仙台(せんだい)はどうであろうか。「センダイ」は「センナイ」に近く、ダとナは調音の位置が同じ(歯茎の裏)で音価も近い。九州には同じ「センダイ」という地名を「川内」と書く。仙台には広瀬川も流れている。山田秀三さんがご存命ならばぜひ聞いてみたいものである。

次回は朝鮮語